

沙門はくいのCL閑話 43
—法演禪師の「彼」—

遠藤博因

hakuin@river.ocn.ne.jp (富山県南砺市井波CLインストラクター)

今回もまた、禪問答の中から一つ紹介させていただきます。

法演禪師は言った。「釈迦も弥勒も、彼の下僕にすぎない。さあ、言ってみよ、彼とは誰か。」

法演禪師の放ったこの一言、私たちは仏様は尊いものだと思っていますが、あっさりとして彼の下僕にすぎないと言いきっています。下僕と見下した言い方をするぐらいなので、その彼とはよほど尊い存在なのでしょう。一体どこの誰なのでしょう。禅はいつでも、頭を抱え込みたくなるような質問ばかりです。

ここに出てくる釈迦や弥勒という仏様は、皆さん一度は名前を耳にしたことがあるのではないのでしょうか。釈迦は、仏教の開祖であるお釈迦様ですし、弥勒は広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。片足を膝の上に乗せ、片ひじをついて指を頬に触れるような感じで物思いに耽っているような仏像です。仏教では過去、現在、未来にわたり様々な仏様が活躍されるという考え方があります。釈迦は現在仏法が広まっている時代において活躍している現在仏とされています。また弥勒菩薩は現在の仏法がすたれた時代に現れて、世の中を救ってくれる未来仏とされています。お釈迦様が悟りを開かれる前には、過去仏として阿弥陀如来や薬師如来が活躍されていたという、一種の仏教的世界観があります。過去、現在、未来を三世と呼び、それぞれの時代に活躍されている仏様を総称して三世の諸仏といい、仏様の中でも最も上の位に位置し敬われています。

そのような尊い仏様も下僕にすぎないと言っているのは一体誰なのでしょう。いつも書いていますが、禅は既成の概念を一旦打ち破りそこから真の自己を発見する見性という悟りの境地を目的としています。法演禪師の言う「彼」としっかり相まみえることが悟りへの道ということなのです。もちろん彼というのは自分の以外の人ではなく、だからといって単なる今の自分ではないのです。

あまり紹介していませんが、いつも掲げる禪の問答（本則）にはそれぞれ標語（コメント）が付いています。今回はこのコメントも紹介したいと思います。

もしこの彼に相まみえ、彼を確実に把握するならば、交差点で自分の父親に出会うようなものだ。父親かどうかを他人に尋ねる必要はない。

このコメントは明白なことの例えとして、自分の父親の顔を取り上げています。自分の父親の顔をことさら他人にこれは自分の父親の顔ですよと聞くことはあり得ないし、滑稽であります。本当に確信を持って「彼」とは誰か言い得るとするのは、疑いの余地のない明白な「彼」ということになります。しかしいつも書いていますが禅は「彼」という言葉にとらわれていたのでは、いつまでたっても真の「彼」を言い得ることができません。やはり禅は難儀ですね。

レイノルズ先生の言葉に次のようなものがあります。

You can't eat "cake" or play a "guitar" or drive a "car".

Beware words in any form, including these words. 『Reality's Reminders』より引用

あなたは、「ケーキ」を食べることもできないし、「ギター」を演奏することもできないし、「車」を運転することもできません。これらの言葉が含んでいる、いかなる形式にも注意なさい。

私の付けた直訳では意味が通じにくいのですが、当たり前のことですが、字面の「ケーキ」は食べることができませんし、味覚を味わうこともできません。言葉は空虚なものを孕んでいますし、これが言葉の形式なのです。そのような言葉が孕む特異性に注意なさいということだと思います。

ところで「彼」って誰でしょう。Who is "he"?

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌